

平成18年10月の解説（週間天気予報）

【10月の天候状況】

上旬半ばに低気圧が急速に発達しながら本州の太平洋沿岸を進んだため、東日本の太平洋側を中心に大雨が降りました。その後は高気圧に覆われて全国的に晴れの日が多くなりましたが、下旬の初めには日本付近を低気圧が通過してほぼ全国的に雨が降りました。北海道では頻繁に低気圧が通過したため2、3日周期で雨となりました。

月を通しての日照時間は北日本の太平洋側の地方では平年並、その他の地方では平年より多くなりました。降水量は北日本・東日本の太平洋側では平年より多く、平年の300%以上となった観測地点もありました。一方西日本と南西諸島では平年よりかなり少なく、平年の10%を下回った観測地点もありました。気温はほぼ全国的に平年より高くなりました。

【10月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より11ポイント高い81%でした。例年に比べて全ての地方で高く、特に近畿、中国、四国、九州南部地方では13から17%高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差はほとんどの地方で例年より小さく、特に東海、四国、九州北部、九州南部地方では0.6から0.7小さくなり、全国平均では例年より0.3小さい1.9でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差もほとんどの地方で例年より小さく特に東海、近畿、九州南部地方では0.5から0.6小さくなり、全国平均では例年より0.3小さい1.9でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【10月の週間天気予報から】

低気圧がサハリン付近を東へ進む場合には、低気圧からのびる寒冷前線が北日本や東日本を通過します。それと同時に日本の南海上にある前線に小さな規模の低気圧が発生することもあります（図1）。このような場合、東京地方の天気予報では寒冷前線の影響と日本の南海上での前線や低気圧の動向の判断がポイントになります。

図2は10月24日に発表した週間天気予報で使用した29日（5日後）21時の予想気圧配置です。サハリンから北日本の東海上にかけて、寒冷前線（青の実線）にあたる気圧の低い部分があります。この寒冷前線は北日本を通過するものの、東京地方への直接の影響はないと予想し

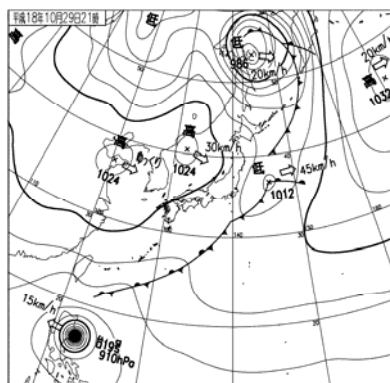


図1 2006年10月29日21時の地上実況天気図

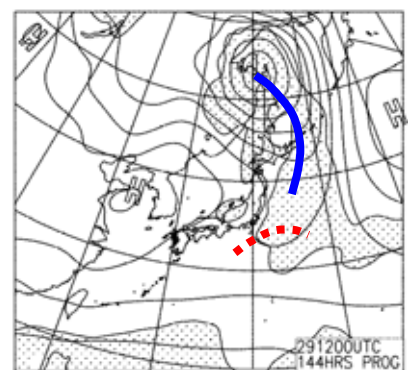


図2 10月29日21時の地上気圧配置と降水域（ハッチ）を予想した天気図（24日発表用の予報資料）。太い実線の位置に概ね寒冷前線があると予想した。また、弱い気圧の谷があると予想した位置を太い点線で示した。

ました。一方関東の南東海上にも気圧の低い部分（赤の破線）があり、低気圧が発生する可能性はあっても、雨雲が広範囲に広がることはない予想し、東京地方での降水の可能性は低いと判断しました。これらのことから 29 日の東京地方の天気を「くもり」と予報しました。

予想通り寒冷前線の通過によって東日本の日本海側と北日本を中心に降水がありましたが、東京地方には影響しませんでした。ところが 28 日午後に関東の南海上に低気圧が発生して東北東に進んだため、この低気圧に伴う雨域が関東地方にかかり、28 日深夜から 29 日朝にかけて関東南部を中心に広い範囲で雨が降りました（図 3）。

北日本を寒冷前線が通過する際には、日本の南海上に別の前線や低気圧が発生したり、活動が活発になったりして、日本付近の天気は大きく変化します。このような気象状況を数日前からの確に予想することが難しい場合があるため、週間天気予報では前日までの予報が大きく変わることもあります。週間天気予報をご利用の際は最新の予報で確認するようにお願いします。



図 3 2006 年 10 月 29 日のアメダス日降水量の分布

【12月の週間天気予報の利用にあたって】

日本列島は南北に長いので、同じ 12 月といっても地方によって天候が大きく違います。図 4 は 2005 年 12 月の札幌、東京、那覇の気温と天気の経過を比較したものです。札幌では雪の日が多く、寒さも厳しく平均気温も氷点下となる日がほとんどです。太平洋側に位置する東京では晴れの日が多くなりますが、日平均気温は 5 度から 10 度程度です。一方、那覇では平均気温が 10 度を下回することはほとんどなく、時には 20 度を上回る日もあります。気温ばかりでなく天気も大きく異なりますので、レジャーやビジネスなどで旅行をする際には、現地の天候に合った履物や服装などの準備のために週間天気予報を十分に活用してください。

図 4 2005 年 12 月の日平均気温と日中の天気の経過

